

## 第56回国立大学図書館協会総会ワークショップ B 議事要旨

日 時： 平成 21 年 6 月 19 日（金） 15:00～17:30  
会 場： 新潟コンベンションセンター「朱鷺メッセ」 中会議室 201  
参加者： 91 機関 112 名  
テ ー マ： 学習・教育活動と連携した図書館サービスについて  
司 会： 丸野俊一（九州大学附属図書館長）  
司会補助： 濱崎修一（九州大学附属図書館事務部長）

### はじめに

司会の丸野九州大学附属図書館長から開催趣旨についての説明があった。

次期中期計画・中期計画期間に向けて、大学図書館は学習・教育支援機能をさらに強化することが必要である。いかにして新しい図書館のあり方を探っていくかが一つの大きなテーマになる。

今まで、それぞれの大学において、図書館が学習・教育支援活動を行ってきたが、今後、さらに大学の学習・教育活動と連携した図書館サービスが必要と考えられるため、今後の方向性について議論し、新しい方向性を探っていきたい。

また、平成 18 年 3 月の「学術情報基盤の今後の在り方について（報告）」においても、「現時点で、多くの大学で行われている図書館の情報リテラシー教育は教養教育及び各専門分野における教育との連携が不十分であり、効果が限定的である」と指摘されているところだ。

本日のワークショップにおいては、教育との連携について、皆様から積極的な発言をいただき、実りある議論をしたいと考えるので、協力をお願いします。

### 第1部 事例報告等

- 1 「教員との連携による図書館サービス “授業資料ナビゲータ(PathFinder)” と “ポッドキャスト@千葉大学図書館”を通して」と題して、丸茂千葉大学附属図書館情報サービス課専門職員より、千葉大学における2つの取り組みについて報告が行われた。
- 2 「大学教育活動と連携するための展望と戦略」と題して、米澤国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課長より、自身の山形大学在任中の経験も踏まえ、教員と図書館職員でどのような連携ができるかについて報告が行われた。
- 3 「大学における学習・教育活動と図書館の連携の可能性を探る 文系教員の立場から」と題して、柴多長崎大学附属図書館長より、文系教員の立場から、教員がどのような授業を行っていて、その授業から見た時に図書館がどのように見えているか、教員は図書館に対してどのような希望・要望をもっているのか及び図書館長として長崎大学で考えていることや実施してきたことについて報告が行われた。
- 4 「国立大学図書館の大学教育支援ニーズとシーズ」と題して、吉田九州大学附属図書館副館長より、理系教員及び教育センター教員としての立場から、学習方法の変化に伴い、オンデマンド学習に使用する教材（電子スライド）に含まれる他者の著作物に対する著作権処理の重要性と、図書館職員に期待する支援について報告が行われた。

## 第2部 ディスカッション

第1部の事例報告を踏まえ、事例報告者4名及び参加者により、「学習支援」と「授業支援」を議論の切り口としてディスカッションが行われた。主な意見は次のとおりであった。

- ・教員が図書館に望んでいることと図書館員がやりたがっていることがアンマッチである。この幅がなかなか狭まらないということが一番の問題だが、どう埋めていけばよいのか。
- ・今までの図書館職員には、授業を実際に見て、学生にどのような指導が行われているののかを知るといった努力が足りなかったと思う。シラバスを読みこなすのも大事だが、実際に授業を見に行って、現場でどのように授業が行われていて、どのような学習・教育支援が必要なのかを見極めることも大事。
- ・教員と図書館職員がワーキンググループ等でディスカッションする中で、教員と図書館職員のつながりが出来ていく。教員側から職員へアプローチすることはあまりないので、職員が相談なり何なり積極的にアプローチしていく中で、段々と双方向のコミュニケーションが形成されていくのではないかと考える。
- ・学内の委員会に図書館職員が出席することは重要である。大学がどのようなことをやろうとしているのか、そこに図書館がどのように関わることが出来るのかという問いをもって参加してほしい。
- ・図書館職員が教育の現場をきちんと知って支援活動を行うことが大事だと思う。例えば、教員にパスファインダーの話をするにしても、図書館職員がもう少し踏み込んでいくことが必要である。
- ・どこの大学でも予算がないという話だが、図書館予算ではなく、大学戦略の予算で図書館を作っていこうという観点から学習支援を進めていけば、図書館職員から教員に言わなくても大学が措置してくれる話だと思う。
- ・少なくとも多くの大学は、図書館というものは教育や研究の基盤であるという認識は持っていると思う。その中でどのくらい教育の核として図書館を支援していくかだと思う。
- ・例えば、パスファインダーについて言えば、データの形式を横並びで整えないと、単に一大学のおもちゃになる。それを超えるためには、そろそろパスファインダーのフォーマットのようなものを横の連絡で決めないといけない。もし決めることが出来たら、図書館の重要な支援材料になると思う。
- ・理事と図書館長がイコールとなっていると、戦略的なことを図書館長が取り入れていくことができるし、大学の中核部に訴えかけやすい組織になる。そういう組織にしておくのも一つの方法ではないかと思う。
- ・理事と図書館長がイコールであっても、理事の立場と図書館長の立場は利益相反になるので経費のかかる話は苦労することが多い。
- ・館長が理事・副学長を兼務している大学の方が意思決定が早いし、改革のスピードも速い。
- ・大学にとってどういう教育をしたいかという議論がまずあって、そこに図書館がどう関わられるかという議論をまずすべきだ。図書館がFDという形でもっと関与できないかとか、図書館が何かできないかという議論はちょっと違う気がする。

最後に、司会者より、図書館が教育や研究の基盤となるためには、教員側が出来ることと職員側が出来ることの双方向でよりよい図書館のあり方を探っていく必要があることが共通認識された。その中で、新しい図書館のサービスのあり方はどうあるべきなのか、学習支援だけでなく教員の授業支援の中に図書館職員がどのように参画できるのか、参画のあり方はどうあるべきなのかを議論していくことが必要と思われるとの感想が述べられ、ワークショップを終了した。